ISSN 1349-385X

名古屋大学 大学文書資料室ニュース

NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第26号　2009. 3

目次 Contents

企画展「伊吹おろしの若者たち」（八高展）の開催 ―― 2
八高の面影をたずねて（大学文書資料室 室員 堀田慎一郎） ―― 4
八高創立百年記念祭 ―― 6
資料室日誌（抄） ―― 7
博物館にて、名大史の常設展示コーナーがオープンします ―― 8

八高で使われていた時鐘（左、総高51.5cm）と校印（右、一番大きな印の方寸6.3cm×6.1cm）。
名古屋市博物館所蔵。八高展においても展示された。

企画展「伊吹おろしの若者たち」(八高展)の開催

1．開催の背景と経緯

本ニュースの前号でも簡単にお知らせしましたが、2008（平成20）年10月７日から11月８日において、第15回名古屋大学博物館企画展「伊吹おろしの若者たち—八高創立百年の歴史から—」（以下、八高展）が開催されました。博物館と大学文書資料室の共催によるものです。

旧制第八高等学校（八高）は、1908（明治41）年に、愛知県や名古屋市の盛んな誘致運動が実る形で、全国で八番目の高等学校として創設されました。帝国大学などへ学生を送り出した全国屈指のエリート養成校としての歴史をへて、戦後の教育改革によって新制名古屋大学に包括されたのち、1950年（昭和25）に廃止されました。

戦前における高等教養教育をにない、廃止後もその教員の多くが名大教養部で教鞭をとったことを考えると、八高は名大教養部の前身にあたるとともに、教養教育の源流であるともいえます。そのキャンパスも名大教養部に引き継がれました（本ニュース４～５頁に関連記事があります）。

大学文書資料室（以下、資料室）は、ホームカミングデイや各種フォーラムなどにおいて、名大の歴史についての展示を数多くおこなってきました。ただ今回のように会期の長いテーマ展は、2002年の４月から８月にかけて、名古屋大学博物館特別展として、やはり博物館との共催で開かれた、「名帝大けふ誕生—初代総長渋澤元治とその時代—」以来となります。

この八高展を開催するにあたっては、八高の同窓会である八高会（本部は名古屋市）の全面的なご協力を得られたことが、きわめて大きな意味を持ちました。

八高会と名大は、最近まで密接な関係にあったとはいえませんでした。また、これまで資料室にあった八高関係資料といえばコピーがほとんどで、それも限られた刊行物のバックナンバーでしたから、魅力的な展示会を開催することが難しい状況にあったのです。

それが2004年度から、八高会と資料室の本格的な交流・連携がはじまりました。これにより、八高会を通じて卒業生の方々の所蔵資料を収集し、これを資料室へご寄贈いただくという事業を展開することができました。また2005年２月には、八高会から資料管理費として寄附金をいただいています。そして現在までに、600点近い貴重な資料が資料室に収められました。これに加えて、資料室も独自に資料収集に努めた結果、八高展を開催する資料的基盤が整ったのです。

2．準備作業と展示内容

実際に八高展の開催が検討されはじめたのは、2006年からです。当初より、八高創立100周年の2008年を期して、博物館と資料室によって企画が練られました。そして2008年１月には、博物館の企画展として、博物館と資料室の共催によって開催することが正式に決まり、本格的な準備作業に入りました。

展示内容は、八高の歴史を概観できる通史的な要素は持たせるものの、とくに学生の生活と文化に重点を置くことになりました。展示題目の「伊吹おろしの若者たち」はここから来ています。「伊吹おろし」は、八高の最も代表的な寮歌の題名で、八高や八高生を象徴する言葉でもあります。また、学術的に厳密な調査を前提にしながらも、研究者を対象とせず、誰が見ても楽しめるくらいのものをめざしました。かつて名古屋に八高という大きな存在があり、それが名大の教養教育の源流にあたることを、親しみやすい形で紹介し、結果として教養教育のあり方についての社会の関心を高めることができればよい、といったスタンスです。

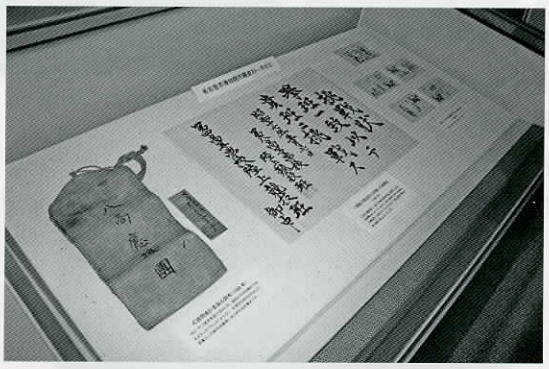
準備作業は、他の業務に追われながらの厳しいスケジュールではありましたが、展示するに足るだけの資料が多く集まり、写真についても、戦前の文献のみならず、戦後の八高会による写真集なども充実していました。むしろ、その中からとくに良いものを厳選するのが大変なくらいで、楽しい作業でもありました。

展示会場の様子①（入口付近）

展示は、29枚のパネルと50項目（点数でいえばそれ以上）の展示品からなりますが、具体的な内容をここ

で紹介する余裕はありません。『名古屋大学大学文書資料室紀要』第17号（2009年３月）および『名古屋大学博物館報告』第24号（2008年12月）に克明な記録が掲載されていますので、そちらをご覧ください。

会場の様子②　会場の面積は約140m²



名古屋市博物館から借用した展示品（一部）

展示費としては、平成20年度総長裁量経費を得ることができ、さらに八高会からも博物館へ寄附金をいただきました。これらにより、名古屋市博物館の便宜を得て、そのきわめて貴重な所蔵品を借用して展示することが可能になり、この地域に残る八高関係資料をほぼ網羅した展示が実現しました。また、上質紙を使った写真図録の発行、八高をテーマとする名大史ブックレット12の増刷など、観覧者への配布物も充実しました。とりわけ八高会には、展示初日の10月７日に感謝状を贈呈させていただきましたが、ここにあらためて感謝の意を表したいと思います。

またこの八高展は、名古屋大学創立70周年記念行事委員会の承認を得て、その記念事業の一つとして位置づけられました。今回の記念事業では、「創立70周年」に、その前身諸学校の歴史を含めた「創基138周年」という言葉を添えることになりました。名大は、これまでも前身諸学校の歴史を大切にしてきましたが、それがより明確になったといえます。これによって、八高展の意義もさらに高まったといえるでしょう。

３．開催の結果と特別講演会

さて、こうして約１ヵ月（日・月曜日は休館）にわたって開催された八高展の観覧者数は、2,187名でした。名古屋大学博物館の企画展としては成功であったといえます。会期中の10月18日には、名古屋大学ホームカミングデイがおこなわれ、八高展はその一企画としても位置づけられ、多くの人を集めました。また、八高会による八高創立百年記念祭（本ニュース６頁を参照）による企画の一翼をになうこともできました。新聞では、中日新聞と読売新聞が八高展の開催を報じ、会期後ではありますが、朝日新聞が展示パネルの中でふれられた話題を取り上げ、大きな記事になりました。

また、会期後半の10月29日には、博物館において資料室の山口拓史室員による講演「寸描―第八高等学校」がおこなわれました。会場の講義室がほぼ満席となり、博物館の特別講演会としては稀有の大入りであったといいます。会場には、八高会から加藤一三会長らをお招きし、講演後には入場者からの質問にお答えいただくなど、大いに盛り上がりました。

講演する山口拓史室員

特別講演会会場の様子

この講演とその後の質疑の模様については、『名古屋大学大学文書資料室紀要』第17号に、音声記録を翻刻した記録と、当日の配布資料が掲載されています。

このように、今回の八高展は、名大および社会への少なからぬ貢献を果たし、所期の目的を達することができたと考えています。

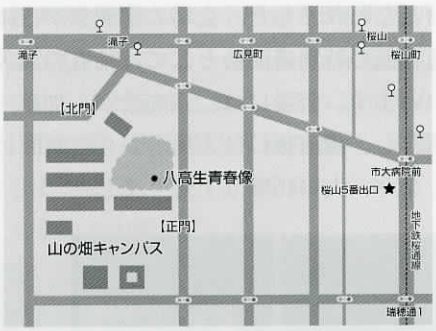
八高の面影をたずねて

—名市大山の畑キャンパス—

大学文書資料室　室員　堀田 慎一郎

2008（平成20）年９月下旬のある晴れた日、私は名古屋市立大学（名市大）山の畑キャンパスを訪れました。

本来の目的は、「八高展」（本ニュース２～３頁を参照）の展示パネルに掲載する写真を撮影するためです。ただ、58年前までは名大旧教養部の前身にあたる第八高等学校（八高）のキャンパスがあり、その後も44年前までは名大教養部が置かれていたこの場所を、展示に先立ち、実際に訪れたかったこともあります。



地下鉄桜山駅から、西へ10分ほど歩くと、名市大山の畑キャンパス（名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１）があります。創立直後の八高が、当時は愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑といったこの地に移転したのは、1909（明治42）年のことでした。県が買収して寄付したこの土地は、当時は周囲に一軒の家もなく、大根畑が広がる田園風景のただ中にありました。瑞穂台地の一角にあったため、キャンパスは「瑞陵」と通称されていました。すでに名古屋市では利用がはじまっていた電灯もとどかず、やむなくガスをひいたといいます。しかしまもなく呼続町は、工場進出の著しい地域となり、1921（大正10）には名古屋市に編入されて、市街地化が急速に進みました。

昭和初期の八高キャンパス。周辺の発展が著しい。

私が最初に足を運んだのは、キャンパスすぐ近くの滝子商店街です。すでに街並みに八高があった時代の面影はないでしょうが、商店街の近く、市バス滝子停留所付近に、八高正門の門柱をモデルにした、滝子商店街振興組合によるモニュメント（街燈）が建っています。現在、その八高の正門は、犬山市の野外博物館「明治村」の正門として利用されているのはご存じかと思います。

滝子商店街の街燈

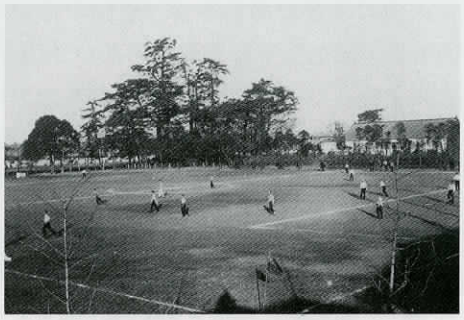
山の畑キャンパスの配置図

そして私は、滝子商店街方面からキャンパスに向かい、北門から入りました。まだ夏休みですので、人影は多くありません。少し進むと、非常に大きな４本の樹木が目につきます。太いものは直径が約1.5mもあるこのクスノキは、八高時代からここにあり、樹齢100年前後ではないかと言われています。クスノキの古木は珍しく、植物学的にも貴重なものです。

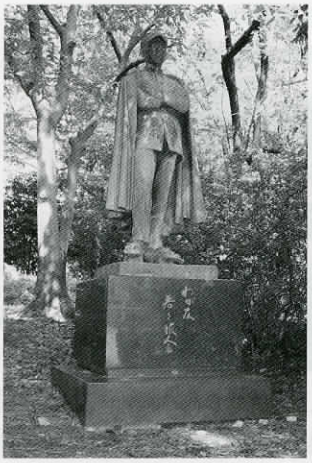
山の畑キャンパスのクスノキの古木

さらに進むと見えてくるのが、何本かの樹木に覆われた、少し盛り上がった円形の小山です。これは「八高古墳」（後述）の陪塚にあたるそうです。この森（林？）が、当時から八高生にその名で親しまれた「剣ヶ森」で、八高の校庭跡にあたります。そして、森に少し入った所にあるのが、学生帽に学生服、厚いマントをはおり、高下駄を履いた八高生をイメージしたブロンズ立像、「八高青春像」です。

現在の「剣ヶ森」全景



1935年頃の校庭。正面に剣ヶ森。左脇がクスノキか。



八高青春像

これは、1988（昭和63）年に、八高会（八高の同窓会）が八高創立80周年を記念して建立したものです。座台には、八高の代表的な寮歌「光のどけき」の一節からとった題字「わが友　若き旅人よ」が刻まれています。また、蚊を追い払いながらもう少し奥へ行くと、八高正門の門柱をかたどった、「第八高等学校所在之地」と刻まれた石塔を見ることができました。これも八高会が、八高創立50周年を記念して建てたものです。

さて、ここから南へ行くと、学生会館の前の低い石垣がめぐらされた一角に、背の低い南国風の植物が数本まとまって植えてあります。これが八高のシンボルの一つともなっていたソテツです。当時は正門を入ってすぐの本館玄関前にあったこのソテツは、1945年の空襲で黒こげになり、枯れてしまうかと思われましたが蘇生し、1978年に現在の場所に植えかえられました。現在は、高く生い茂った往年の勢いはさすがにありませんが、これも八高のモニュメントの一つといえましょう。

山の畑キャンパスのソテツ

1933年当時のソテツ。集合写真がよく撮られた。

ソテツから東に目を転じますと、剣ヶ森よりも大きな、これも樹木に覆われた小山があります。これは、全長50mの前方後円墳で、「八高古墳」と呼ばれています。前方部は、かつてここに八高の学生食堂が建てられたため、損なわれているそうです。そして東門からキャンパスをあとにしました。

ソテツから見た八高古墳

八高の往時をしのばせる建築物はすでになくなっている名市大山の畑キャンパスですが、古墳や樹木・植物などは、八高当時からの印象深いものが残っています。また、八高が廃止されたあとに作られたモニュメントもあり、つぶさに歩けば、八高の面影をたずねることができるでしょう。

八高創立百年記念祭

2008（平成20）年10月18日、名古屋市中区栄の名古屋国際ホテル国際ホールにおいて、「八高創立百年記念祭」が盛大に挙行されました。

これは、旧制第八高等学校（八高）が創立されてから、今年で100周年になることを記念して、八高の同窓会である八高会が開催したものです。「記念祭」の名称は、八高が存在していた時代に毎年開かれていた、今の学園祭にあたる「創立何周年記念祭」からきています。八高は1950（昭和25）年に廃止されましたが、1958年の八高創立五十年記念祭をはじめとして、八高会は定期的に記念祭を開催してきました。

今回の百年記念祭には、全国から500人近い同窓生が集まりました。すでに、一番若い卒業生でも70代半ばをこえていることを考えると、これは大変な数だと思います。その他、同窓生の家族や遺族、来賓、招待者などを合わせると、参列者約700人という、予想をはるかに上まわる大盛況でした。

記念祭会場の全景

名古屋大学では、来賓の１人として、総長が招待をうけましたが、当日がホームカミングデイと全学同窓会総会であったことから、代理として杉山寛行理事・副総長が出席しました。そのほか、博物館と大学文書資料室も招待をうけ、西川輝昭博物館長と堀田慎一郎資料室員が参列しました。

このように名古屋大学が厚く遇された背景には、名古屋大学が八高をその前身学校の一つとして位置づけてきたこととともに、４年ほど前から大学文書資料室を中心に八高会と密接に連携して八高関係資料の収集をおこない、それが「八高展」（本ニュースの記事参照）の開催にもつながったという経緯があります。記念祭前日の10月17日には、八高にまつわる場所をめぐるバスツアーが企画されましたが、「八高展」もそのコースとなり、多くの方々にご観覧いただきました。

第１部は式典で、午前11時からおこなわれました。開会の辞、物故者への黙祷、寮歌「伊吹おろし」斉唱、八高会会長による式辞ののち、杉山理事が総長に代わって祝辞を代読しました。

総長の式辞を代読する杉山理事

その後、他の来賓のあいさつ、恩師やその家族への記念品贈呈、記念祭実行委員長のあいさつと続き、式典の最後を飾ったのが、「百年記念祭祝祭合唱団・祝祭アンサンブル」による記念演奏でした。これは、この記念祭のために、名古屋大学出身者を中心に特別に編成されたものです。指揮者やソリストには、プロが招かれました。曲目は、ベートーベンの交響曲第９番第４楽章のいわゆる「歓喜の歌」です。この演奏によるさらなる盛り上がりのうちに、式典は終わりました。

祝祭合唱団・祝祭アンサンブルによる演奏の様子

第２部は祝宴です。卒業生の皆さんはご高齢とは思えないほどお元気で、さまざまな寮歌を合唱するなどをしているうちに、あっという間に２時間半がすぎてしまったという印象でした。

八高会は、現在でも月刊機関紙『伊吹おろし』の発行などの活動を続けています。当初は、百年記念祭で活動に一応の区切りを付けるとのことでしたが、百年記念祭が予想以上の盛り上がったことで、「百五年記念祭」なども視野に入っているようです。

資料室日誌（抄）

9月4日　情報メディア教育センターより、70周年記念誌編さんのための資料を借用。
八高展のための短期雇用事務補佐員３名が着任（～10月）。

9月8日　大学史展示WGを開催（以後、９／29、９／30、12／19、１／20、１／22、１／28にも開催）。

9月9日　山口拓史室員が豊田講堂パンフレット作成WGに出席。

9月16日　羽賀祥二室長が創立70周年記念行事委員会に出席。

9月22日　総務部総務課所蔵資料を大学文書資料室（以下、資料室）へ移管。

9月25日　中日新聞記者が来室、名大の正門について取材をうける（９／29朝刊に記事掲載）。

10月7日　名古屋大学博物館第15回企画展「伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」（八高展）はじまる（博物館・資料室共催、期日～11／８）。
博物館にて、八高会からの寄附金への感謝状贈呈式が挙行される。

10月8日　山口室員がホームカミングデイ実行委員会に出席。

10月9日　NHK名古屋放送局がノーベル賞関連取材のため来室（以後10／14、11／10、11／11、11／12、11／19、12／２、12／４、12／５、12／８、12／12にも来室）。
読売新聞朝刊に八高展の記事掲載。

10月10日　中日新聞朝刊に八高展の記事掲載。

10月17日　八高会会員（約100名）が来学し、八高展などを見学。

10月18日　第４回ホームカミングデイの企画として八高展を開催（山口室員が会場対応）。
堀田慎一郎室員が八高創立百年記念祭（八高会主催）に出席。

10月20日　『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第25号を刊行。
愛知大学から４名が視察のため来室。

10月28日　キタン会と名高商関係資料の収集方法について協議（以後、11／20、１／８にも協議）。

10月29日　山口室員が博物館特別講演会で「寸描―第八高等学校」を講演。

11月4日　創立70周年記念誌打ち合わせ（以後11／11、11／25、12／10、12／18、１／６、１／13、１／14、１／31）。

11月5日　堀田室員が南山学会シンポジウム「モノ・記録・記憶の文化資源化」に出席。

11月10日　関係者と西條八束名誉教授関係資料について協議。

11月12日　理学部物理学教室と、ノーベル賞関連取材に対する物理学教室資料に関する対応について協議。
朝日新聞記者来室、八高について取材をうける（11／16朝刊に記事掲載）。

11月14日　附属図書館医学部分館より戸苅文庫の一部を移管。

11月25日　南山大学史料室の永井英治准教授と、東海地区大学アーカイブズの連携について協議。

12月4日　NHKがノーベル賞関係番組のため資料室を収録（12／10、12／12放送）。

12月8日　資料登録にバーコードシールを導入。

12月16日　創立70周年記念誌編さんのための事務補佐員４名が着任（～３月）。

12月17日　情報・言語合同図書室から、教養部史関係資料を目録データ入力のため借用。

12月18日　創立70周年記念誌執筆委員会に出席。

12月22日　東京芸術大学から３名が来室し、アーカイブズ設立ための調査・視察。

12月24日　堀田室員がホームカミングデイ実行委員会に出席。
医学系研究科総務課を訪問し、創立70周年記念誌編さんのための資料を借用。

12月25日　室長と西川輝昭博物館長が、大学史展示について杉山寛行理事と協議。
法人文書の評価選別基準の策定のため、大学院生命農学研究科にて法人文書を調査。

１月16日　第１回東海地区大学アーカイブズ懇話会を開催。

１月22日　雑誌『中経連』関係者３名が来室、連載記事に関する取材をうける。

１月24日　山口室員、立教大学特色GPシンポジウム「自校史教育の到達点と今後の課題」で報告。

○博物館にて、名大史の常設展示コーナーがオープンします
―名古屋大学の歴史にまつわる資料をお寄せください―

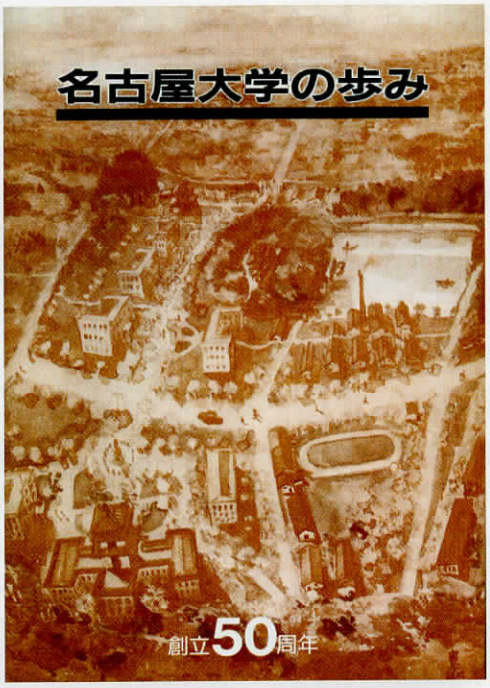
大学文書資料室では、これまでホームカミングデイや各種フォーラムなどにおいて、名古屋大学の歴史についての展示を臨時におこない、コンテンツを充実させてきました。ただ、常設的な展示は、スペースの問題もあって、これまで実現に至りませんでした。大学の顔ともいえる場所に、常設的な展示を配してその大学の歴史を広くアピールすることの必要性は、国立大学においてもますます高まっているといえます。

そしてこのたび、名古屋大学創立70周年記念事業の一環として、名古屋大学博物館３階の約110m^{2}のスペースに、名大の歴史についての常設展示コーナーが開設されることになりました。大学文書資料室も展示の製作に参画しています。これは、創立70周年記念式典が挙行される本年10月17日にオープンする予定です。

また、これも創立70周年記念事業の一つとして、式典で配布する名古屋大学創立70周年記念図録（仮称、オールカラー50頁程度）を、大学文書資料室を中心に製作中です。

つきましては、この機会に、名大史にまつわる資料（物品類、写真、文書、刊行物…）を、大学文書資料室または博物館へぜひお寄せください。展示に使うことができない場合でも、歴史資料として重要なものは、大学が責任をもって永く保存させていただきます。

名大史の常設展示コーナーが設けられる予定の名古屋大学博物館（古川記念館）。名大のシンボルともいえる豊田講堂の向かって右手前にある。



1989（平成元）年の創立50周年記念式典で配付された冊子。

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第26号
Nagoya University Archives News No. 26

名古屋大学大学文書資料室
室　　長　羽賀祥二（教授・併任）
専任室員　山口拓史
　　堀田慎一郎
専門職員　武藤英幸
主　　任　奥谷明稔
　　若山裕司
事務員　増田よしみ

発行日　2009年3月31日（年2回刊）
編集
発行　名古屋大学大学文書資料室
名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話：(052) 789-2046
FAX：(052) 788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38